TADOKU JUNIOR　ビアトリクス・ポターのおはなし　★★★★☆ ながい　997語

The Tale of the Flopsy Bunnies

フロプシーのこどもたち

Beatrix Potter（1909年の本）　**原文そのまま**　朗読：MichaelMaggs

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　レタスを食べすぎてぐっすりねむってしまったフロプシーのこどもたち。気がつかないうちに、マグレガーさんのふくろの中へ……。

It is said that the effect of eating too much lettuce is "soporific."

I have never felt sleepy after eating lettuces; but then I am not a rabbit.

They certainly had a very soporific effect upon the Flopsy Bunnies!



When Benjamin Bunny grew up, he married his Cousin Flopsy. They had a large family, and they were very improvident and cheerful.

I do not remember the separate names of their children; they were generally called the "Flopsy Bunnies."



As there was not always quite enough to eat,—Benjamin used to borrow cabbages from Flopsy's brother, Peter Rabbit, who kept a nursery garden.



Sometimes Peter Rabbit had no cabbages to spare.



When this happened, the Flopsy Bunnies went across the field to a rubbish heap, in the ditch outside Mr. McGregor's garden.

Mr. McGregor's rubbish heap was a mixture. There were jam pots and paper bags, and mountains of chopped grass from the mowing machine (which always tasted oily), and some rotten vegetable marrows and an old boot or two. One day —oh joy!—there were a quantity of overgrown lettuces, which had "shot" into flower.



The Flopsy Bunnies simply stuffed lettuces. By degrees, one after another, they were overcome with slumber, and lay down in the mown grass.



Benjamin was not so much overcome as his children. Before going to sleep he was sufficiently wide awake to put a paper bag over his head to keep off the flies.



The little Flopsy Bunnies slept delightfully in the warm sun. From the lawn beyond the garden came the distant clacketty sound of the mowing machine. The bluebottles buzzed about the wall, and a little old mouse picked over the rubbish among the jam pots.

(I can tell you her name, she was called Thomasina Tittlemouse, a woodmouse with a long tail.)



She rustled across the paper bag, and awakened Benjamin Bunny.

The mouse apologized profusely, and said that she knew Peter Rabbit.



While she and Benjamin were talking, close under the wall, they heard a heavy tread above their heads; and suddenly Mr. McGregor emptied out a sackful of lawn mowings right upon the top of the sleeping Flopsy Bunnies! Benjamin shrank down under his paper bag. The mouse hid in a jam pot.



The little rabbits smiled sweetly in their sleep under the shower of grass; they did not awake because the lettuces had been so soporific.

They dreamt that their mother Flopsy was tucking them up in a hay bed.

Mr. McGregor looked down after emptying his sack. He saw some funny little brown tips of ears sticking up through the lawn mowings. He stared at them for some time.



Presently a fly settled on one of them and it moved.

Mr. McGregor climbed down on to the rubbish heap—

"One, two, three, four! five! six leetle rabbits!" said he as he dropped them into his sack. The Flopsy Bunnies dreamt that their mother was turning them over in bed. They stirred a little in their sleep, but still they did not wake up.



Mr. McGregor tied up the sack and left it on the wall.

He went to put away the mowing machine.



While he was gone, Mrs. Flopsy Bunny (who had remained at home) came across the field.

She looked suspiciously at the sack and wondered where everybody was?



Then the mouse came out of her jam pot, and Benjamin took the paper bag off his head, and they told the doleful tale.

Benjamin and Flopsy were in despair, they could not undo the string.

But Mrs. Tittlemouse was a resourceful person. She nibbled a hole in the bottom corner of the sack.



The little rabbits were pulled out and pinched to wake them.

Their parents stuffed the empty sack with three rotten vegetable marrows, an old blacking-brush and two decayed turnips.



Then they all hid under a bush and watched for Mr. McGregor.



Mr. McGregor came back and picked up the sack, and carried it off.

He carried it hanging down, as if it were rather heavy.

The Flopsy Bunnies followed at a safe distance.



They watched him go into his house.

And then they crept up to the window to listen.



Mr. McGregor threw down the sack on the stone floor in a way that would have been extremely painful to the Flopsy Bunnies, if they had happened to have been inside it.

They could hear him drag his chair on the flags, and chuckle—

"One, two, three, four, five, six leetle rabbits!" said Mr. McGregor.



"Eh? What's that? What have they been spoiling now?" enquired Mrs. McGregor.

"One, two, three, four, five, six leetle fat rabbits!" repeated Mr. McGregor, counting on his fingers—"one, two, three—"

"Don't you be silly; what do you mean, you silly old man?"

"In the sack! one, two, three, four, five, six!" replied Mr. McGregor.

(The youngest Flopsy Bunny got upon the window-sill.)



Mrs. McGregor took hold of the sack and felt it. She said she could feel six, but they must be old rabbits, because they were so hard and all different shapes.

"Not fit to eat; but the skins will do fine to line my old cloak."

"Line your old cloak?" shouted Mr. McGregor—"I shall sell them and buy myself baccy!"

"Rabbit tobacco! I shall skin them and cut off their heads."



Mrs. McGregor untied the sack and put her hand inside.

When she felt the vegetables she became very very angry. She said that Mr. McGregor had "done it a purpose."



And Mr. McGregor was very angry too. One of the rotten marrows came flying through the kitchen window, and hit the youngest Flopsy Bunny.

It was rather hurt.



Then Benjamin and Flopsy thought that it was time to go home.



So Mr. McGregor did not get his tobacco, and Mrs. McGregor did not get her rabbit skins.

But next Christmas Thomasina Tittlemouse got a present of enough rabbit-wool to make herself a cloak and a hood, and a handsome muff and a pair of warm mittens.



BY BEATRIX POTTER

F. WARNE & Co

レタスを食べすぎると「ねむくなる」と言われています。

わたしはレタスを食べても、ねむくなったことはありません。でもそれは、わたしがウサギではないからでしょう。

フロプシーのこどもたちには、レタスはたしかに、とてもよくききました。すっかりねむくなってしまったのです！

ベンジャミン・バニーは大きくなると、いとこのフロプシーとけっこんしました。ふたりには子どもがたくさんいて、先のことはあまり考えない、ほがらかな家族でした。

子どもたちひとりひとりの名前は、おぼえていません。みんなまとめて「フロプシーのこどもたち」とよばれていました。

食べ物がいつもじゅうぶんにあるとはかぎらなかったので、ベンジャミンはよく、フロプシーのお兄さんのピーターラビットからキャベツをかりていました。ピーターは、なえを育てる畑をもっていたのです。

ときには、ピーターラビットにも分けてあげられるキャベツがないことがありました。

そんなとき、フロプシーのこどもたちは野原をこえて、マグレガーさんの畑の外の、みぞにあるごみの山へ行きました。

マグレガーさんのごみの山には、いろいろな物がまざっていました。ジャムのびんや紙ぶくろ、草かりきでかった草の山（いつも油のあじがしました）、くさったウリが何本か、それに古いながぐつが一つ二つ。ある日――うれしいことに！――花がさくほどのびすぎたレタスが、たくさんすててありました。

フロプシーのこどもたちは、レタスをおなかいっぱいつめこみました。だんだんと、一ぴき、また一ぴきと、ねむけにまけて、かった草の上にころんと横になりました。

ベンジャミンは、子どもたちほどねむくはなりませんでした。ねむる前に、ハエよけに紙ぶくろを頭にかぶるくらいの元気はありました。

小さなフロプシーのこどもたちは、あたたかいお日さまの下で、気もちよさそうにねむっていました。畑のむこうのしばふから、草かりきのカタカタという音が遠く聞こえてきました。アオバエがかべのまわりをブンブンとび、小さな年よりのネズミが、ジャムのびんのあいだのごみをかきわけていました。

（名前を教えてあげましょう。トーマシナ・チュウチュウといって、しっぽの長い森ネズミでした。）

ネズミが紙ぶくろの上をカサカサと通ったので、ベンジャミン・バニーは目をさましました。

ネズミは何度もあやまって、ピーターラビットのことを知っていると言いました。

ネズミとベンジャミンが、かべのすぐ下で話をしていると、頭の上で重い足音がしました。そしてとつぜん、マグレガーさんが、かった草を一ふくろ分、ねむっているフロプシーのこどもたちの真上にぶちまけたのです！ベンジャミンは紙ぶくろの下で小さくちぢこまりました。ネズミはジャムのびんの中にかくれました。

小さなウサギたちは、ふってくる草の下で、ねむったままにっこりわらっていました。レタスがよくきいて、ぐっすりねむっていたので、目をさまさなかったのです。

子ウサギたちは、お母さんのフロプシーが、ほし草のベッドでふとんをかけてくれている夢を見ていました。

マグレガーさんは、ふくろをあけたあと、下を見ました。かった草の中から、ちょこんと茶色い耳の先がつき出ているのが見えました。マグレガーさんは、しばらくそれをじっと見ていました。

やがて、ハエがその一つにとまると、耳がぴくっと動きました。

マグレガーさんは、ごみの山の上におりてきました――

「ひい、ふう、みい、よう！ いつつ！ むっつも、ちっちゃなウサギがいるぞ！」と言いながら、マグレガーさんは子ウサギたちをふくろに入れていきました。フロプシーのこどもたちは、お母さんがベッドの中でねがえりをうたせてくれている夢を見ていました。ねむったまま少し体を動かしましたが、それでもまだ目をさましませんでした。

マグレガーさんは、ふくろのロをしばって、かべの上におきました。

そして、草かりきをかたづけに行きました。

マグレガーさんがいないあいだに、家にのこっていたフロプシーおくさんが、野原をこえてやってきました。

フロプシーは、あやしそうにふくろを見て、みんなはどこにいるのかしらと思いました。

すると、ネズミがジャムのびんから出てきて、ベンジャミンも頭から紙ぶくろをとり、二ひきでかなしい出来事を話しました。

ベンジャミンとフロプシーは、ひもがほどけなくて、すっかり、とほうにくれてしまいました。

でも、チュウチュウおくさんは、ちえのあるネズミでした。ふくろの下のすみを、かじってあなをあけたのです。

小さなウサギたちは引っぱり出されて、目をさますように、つねられました。

お父さんとお母さんは、からっぽになったふくろに、くさったウリを三本と、古いくつみがきブラシと、くさったカブを二つ、つめこみました。

それから、みんなでしげみの下にかくれて、マグレガーさんを見はっていました。

マグレガーさんはもどってくると、ふくろを持ち上げて、運んでいきました。

まるでかなり重いかのように、ふくろをぶらさげて運んでいきました。

フロプシーのこどもたちは、見つからないように、はなれてついていきました。

マグレガーさんが家に入るのを、みんなで見とどけました。

それから、こっそりまどの下まで行って、耳をすませました。

マグレガーさんは、石のゆかにふくろをどさっとなげだしました。もしフロプシーのこどもたちが中にいたら、ひどくいたい思いをしたでしょう。

マグレガーさんが、石のゆかの上でいすを引きずる音と、くっくっとわらう声が聞こえました――

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、ちっちゃなウサギが六ぴきだ！」とマグレガーさんは言いました。

「え？何ですって？あの子たち、こんどは何をだめにしたの？」とマグレガーおくさんがたずねました。

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう、ちっちゃな、まるまるとしたウサギが六ぴきだ！」とマグレガーさんは、指でかぞえながらくりかえしました――「ひい、ふう、みい――」

「ばかなことを言わないで。何のことなの、おじいさんったら？」

「ふくろの中だよ！ ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう！」とマグレガーさんは答えました。

（いちばん小さなフロプシーのこどもが、まどのしきいの上にのぼりました。）

マグレガーおくさんは、ふくろをつかんで、さわってみました。六つあるのはわかるけれど、とてもかたくて、形もみんなばらばらだから、年よりのウサギにちがいない、とおくさんは言いました。

「食べられやしないわ。でも毛皮は、わたしの古いマントのうらにちょうどいいわね」

「古いマントのうらだって？」とマグレガーさんはどなりました――「売って、たばこを買うんだ！」

「ウサギでたばこですって！わたしが毛皮をとって、ちゃんとしまつしますからね」

わたしが毛皮をはいで、頭を切りおとしますからね」

野さいがさわったとたん、おくさんは、かんかんにおこりました。野さいにさわったとたん、おくさんは、かんかんにおこりました。

そしてマグレガーさんも、かんかんにおこりました。くさったウリが一本、台所のまどからとんできて、いちばん小さなフロプシーのこどもに当たりました。

その子は、ちょっといたい思いをしました。

そこでベンジャミンとフロプシーは、そろそろ家に帰ったほうがいいと思いました。

こうして、マグレガーさんはたばこを手に入れられず、マグレガーおくさんもウサギの毛皮を手に入れられませんでした。

でも、つぎのクリスマスに、トーマシナ・チュウチュウは、ウサギの毛をたくさんプレゼントしてもらいました。それで、マントとずきんと、すてきなマフと、あたたかい手ぶくろを作れるほどでした。

ビアトリクス・ポター 作

F・ウォーン社

たんご と クイズ フロプシーのこどもたち

lettuces レタス	**cabbages** キャベツ	**paper bag** 紙ぶくろ
mouse ネズミ	**sack** 大きなふくろ	**ears** 耳
turnips カブ	**mittens** 手ぶくろ（ミトン）	

Q1 子ウサギたちがねむくなったのは、何を食べたから？

① ニンジン　② キャベツ　③ レタス

Q2 ふくろにあなをあけて、子ウサギたちを助けたのはだれ？

① ネズミのトーマシナ　② ピーターラビット　③ マグレガーおくさん

Q3 空っぽになったふくろに、何をつめた？

① 石とすな　② くさったウリやカブ　③ かった草

こたえ

Q1 ③ ごみの山にすててあった、のびすぎたレタスをおなかいっぱい食べて、みんなねむってしまいました。

Q2 ① ちえのあるネズミのチュウチュウおくさんが、ふくろの下のすみをかじって、あなをあけてくれました。

Q3 ② お父さんとお母さんは、くさったウリ三本と古いくつみがきブラシと、くさったカブ二つをつめました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #14220（Beatrix Potter、1909年）。パブリックドメイン。
挿絵：Beatrix Potter（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：MichaelMaggs（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。